

# 三尊形式の聖徳太子像

小 山 正 文

一

日本の歴史上の人物で、聖徳太子（五七四―六二二）ほど大量の肖像が、絵画化され彫刻化された人はない。それはたとえば太子像をかならず安置する真宗寺院だけに限っても、全国に二万点は存在する勘定になるのであるから、超宗派で崇拜された太子の場合は、その数も種類も推して知るべきであろう。

かつて石田茂作博士は、多種多様多量に存在するこのような太子像も分類すると、南無仏太子像、童形太子像、孝養太子像、馬上太子像、摂政太子像、講讃太子像に大別でき、これらにはそれぞれその像の成り立ちを物語る説話があつて、中でも孝養太子像が圧倒的に多いことを大著『聖徳太子尊像聚成』で述べておられる。<sup>（一）</sup>今その大著の図版編をあらため通覧すると、太子像には独尊形のものが多い中に、立像や坐像の太子を中心として、その前後もしくは左右へ童子形の脇侍像を配した三尊形式の太子像が、若干あつて注目される。そのもつとも有名な像が、

いうまでもなく高額紙幣の肖像にも使われ、学校の教科書や各種の図書に登場するあの「聖徳太子及び二王子画像」であろう（図版一）。これは明治十一（一八七八）年まで、唐本御影の名のもとに奈良法隆寺に伝来したものであるが、今は皇室御物として宮内庁京都事務所で保管されている。<sup>(2)</sup>三尊形式の聖徳太子像は、これを嚆矢に別掲表のような諸像が管見に入っている。<sup>(3)</sup>

表を通し知られる第一の点は、三尊形式の太子像が各時代を通じて作られていること。第二の点は彫像より画像の遺品が、はるかに多いこと。第三の点は彫像が正面向きであるのに対し、画像は16を除き右か左を向いていること。第四の点は、両脇（正確には前後とみるべきであろう）の童子形の像が所持する品により、A・Bふたつのタイプに分類可能なこと等々の事実があげられようかと思う。そのA・B両タイプというのは、笏と如意を持つものをAタイプ、燭台と傘蓋を持つものをBタイプとするわけで、2・3（図版二）・4・8・9・11・13・14・15・16の十点が前者、5・6・7・10（図版三）・12（図版四）の五点が後者にそれぞれ該当する。このうちAタイプのものは、太子の向きが右向き（3・8・13・15）と左向き（11・14）があるのに対し、Bタイプはすべて左向きとなっているのも注意を要しよう。この場合Aタイプに左向きの古作品が少ない事実に着目すると、それはBタイプの影響を受けた結果とみることも可能かと思われる。

いずれにしてもA・B両タイプとも三尊形式で、童子形の像を侍者とし、歩みを運ぶ姿で描かれているところより、その基本はやはりかの唐本御影にあることは疑いないとみてよからう。この唐本御影につき鎌倉時代を代表する法隆寺の学僧顕真（…一二二九—六二…）は、その著『聖徳太子伝古今目錄抄』で次のように記す。<sup>(4)</sup>

次太子御影・但於此<sup>ニ</sup>有多ノ義・当寺相伝者<sup>ハ</sup>、唐本ノ御影也・唐人<sup>ハ</sup>・為申結縁<sup>ニ</sup>・詣ル御前<sup>ニ</sup>・其人前<sup>ニ</sup>為彼・応現  
給<sup>リ</sup>・而間<sup>カキテ</sup>・書二複<sup>ヲ</sup>・一本<sup>ヲ</sup>ハ留日本<sup>ニ</sup>・一本<sup>ヲ</sup>ハ本国<sup>ヘ</sup>持帰<sup>ル</sup>・故<sup>ニ</sup>云唐本御影<sup>ト</sup>・  
西山

・聖人云非唐人<sup>ニ</sup>・百済ノ阿佐之前<sup>ニ</sup>現給形<sup>云</sup>・或撰政関白殿<sup>宣</sup>・更<sup>ニ</sup>非他国之像<sup>スカタニ</sup>・日本ノ人ノ装束<sup>ニ</sup>・  
其昔<sup>ハ</sup>・皆如此<sup>也</sup>・故<sup>ニ</sup>日本之様<sup>云</sup>・御冠<sup>ニ</sup>大刀<sup>ヲ</sup>・帶給<sup>ハキ</sup>・持<sup>ト</sup>・笏<sup>シテ</sup>・立像也<sup>御長</sup>・二人ノ童子<sup>ハ</sup>・二人ノ王子也<sup>御長</sup>・此<sup>ハ</sup>・  
殖栗王歟・御影也<sup>也</sup>・  
  
〔以上本文〕

或云唐人染筆写之故云唐本御影云、西松慶政上人<sup>勝月房</sup>為令久・故<sup>ニ</sup>御裏押<sup>ウラニ</sup>・絹<sup>ヲ</sup>・給<sup>ル</sup>・其<sup>ノ</sup>時表紙<sup>ヲ</sup>・令賛<sup>〔註〕</sup>・  
錦<sup>ニ</sup>・給<sup>ル</sup>・  
  
〔以上本文〕

嘉禎四<sup>戊午</sup>年八月十四日近衛殿下

左右ノ童子<sup>ヲ</sup>田村<sup>ト</sup>云事誤也・田村ノ王子<sup>ハ</sup>・舒明天皇之ノ太子<sup>ニテ</sup>・之<sup>ノ</sup>御名也・推古天皇ノ御子也<sup>時</sup>・

左方<sup>ハ</sup>山背大兄王<sup>・</sup>右方<sup>ハ</sup>・植栗王<sup>〔通〕</sup>・此二人歟<sup>時</sup>・或又大兄王与由義王<sup>云</sup>・但廿五人王子中无由義王之名雖而

余所在此文

〔以上裏書〕

ここにおいて顕真は、唐本御影に描かれる二人の童子を共に太子の王子として、左方（向かつて右後方）を  
山背大兄王<sup>やましろのおえのおう</sup>、右方（向かつて左前方）をその異母弟の殖栗王<sup>えぐりのおう</sup>かというのであるが、爾来この説は權威ある法隆寺の  
伝承として現在も生きている。ところが、昭和五十八（一九八三）年一月七日の『朝日新聞』で今枝愛真博士は、  
唐本御影の表装部分向つて右下に「川原寺」らしい文字の痕跡を見出され、この御影がかつて大和飛鳥<sup>やまとあすか</sup>の川原寺<sup>かわらでら</sup>す  
なわち弘福寺<sup>ぐわくふじ</sup>旧蔵品であつた可能性の高いことを指摘のうえ、同寺が歴史的に聖德太子と直接結びつかない寺であ

るところから、本御影も太子像でないかも知れないという衝撃的な説を発表された。<sup>(5)</sup>はたしてそうだとすれば、左右の二童子像も当然太子の王子ではなくなり、顕真の記録も全く無意味なものとなつて、結局、石田茂作博士もいわれるごとく「閻立本の帝王図にならつて、個性なき侍者と見るのが正しい」といふことにならざるをえなくなるわけだが、その後今枝博士が「川原寺」と読まれた文字は、実は表装裂に織り込まれていた「寿・寧・康・福」の「康」の字の銀糸が、永年の間に剝落しあたかも墨跡のように見えたものであることがわかつた。<sup>(7)</sup>

それはともかくとして法隆寺においては、保延六（一一四〇）年の大江親通撰『七大寺巡礼私記』でもすでに

上宮王院亦号夢殿  
亦云東院（中略）

北有七間亭 其東端二間号宝蔵 其内種々宝物等

太子俗形御影一鋪

件御影唐人筆跡也 不可思議也 能々可拝見

とあるごとく、平安時代以来唐本御影が、太子の像として尊崇されてきた事実は疑いなく、それが証拠に保安二（一一二二）年十一月に供養された法隆寺聖靈院安置の太子五尊像をはじめ、各種の摂政太子像や講讃太子像、あるいはここにとりあげている三尊形式の太子像などもみなその姿・形の起源は、この唐本御影に発しているといつても、あながち不当とは思われないほどなのである。

ところで、右聖靈院の太子五尊像であるが、これにつきやはり顕真の『聖徳太子伝古今目録抄』には、次のような詳しい記録を載せている。<sup>(9)</sup>



三尊形式の聖徳太子像

保安二年<sup>壬午</sup>十一月廿二奉移東室

五六

此太子奉動者二ケ度也乍二度共別当院主当災・故更不可奉動云、先師口伝云、

〔以上裏書〕

われわれが今ものこる聖霊院の謹厳な五軀一具の群像名をすべて比定しうるのは、実に右の記録が存するからにほかならず、それぞれの尊名は持物から次記のとおりわかる。

聖徳太子三十四歳——笏<sup>しやく</sup>

太郎王山背大兄王——如意<sup>にょい</sup>

二郎王殖栗王——念珠<sup>ねんじゆ</sup>篋<sup>けつ</sup>

三郎王卒末呂王——大刀<sup>たち</sup>

高麗僧惠慈法師——柄香炉<sup>えこうろ</sup>

ここにおいて注目すべきは、山背大兄王が持つ如意と殖栗王が持つ念珠篋であつて、これはそのままさきにみたAタイプの三尊形太子像の両脇侍が持つ品と一致している事実であらう。つまりそれはいうまでもなくAタイプの左右童子像も、聖霊院像同様その持物から山背大兄王と殖栗王の二人であることを意味するものにほかならない。

そのAタイプの三尊像を所有する鶴林寺・観音寺・大聖勝軍寺・叡福寺などは、いずれも太子ゆかりの寺々であるところから、Aタイプの三尊像は、これらの寺院でも営まれたであろう聖霊会の本尊であつたかも知れないことを指摘しておく。それでは次に同じ三尊形式のBタイプの両脇侍像は、誰と誰なのであろうか。項をあらため考察

十八間也  
・東室ノ九房ナリ一房ニ二間宛<sup>アテナリ</sup>・小子房<sup>モ</sup>又九房也・此モ二間ヲ為ス一房ト但シ大房ノ南三房ヲ新<sup>タメテ</sup>為ス聖  
靈院ト有妻庇<sup>ヒサシ</sup>・木瓦<sup>フキナリ</sup>・葺<sup>フキナリ</sup>・有階隱<sup>ハシカクシ</sup>・在高藍・曇者<sup>ハスノコシキ</sup>・簀子敷也・此内ニ在ス太子ノ御影・玉ノ御冠ニ赤衣・  
以金泥<sup>ツ書ケリ</sup>・折人<sup>ヒト</sup>云文<sup>ヲ</sup>・持<sup>下シタラ</sup>・笏<sup>シヤク</sup>・三人ノ仕者<sup>下シタラ</sup>也王子<sup>ハ</sup>・高麗ノ僧惠慈<sup>ハ</sup>・納ノ袈裟ニ持香呂<sup>ヲ</sup>・太郎王子<sup>ハ</sup>・持如意<sup>ヲ</sup>・二郎王<sup>ハ</sup>・持念珠<sup>ヲ</sup>・三郎王<sup>ハ</sup>・御大刀<sup>ヲ</sup>・持<sup>下ナタラ</sup>・乍<sup>ナタラ</sup>・三人<sup>ハ</sup>・鬢頰<sup>ヒンソウ</sup>・髮<sup>ヲ</sup>・不垂<sup>ラスケレ</sup>・太兄王子<sup>ハ</sup>・着納袈裟<sup>ヲ</sup>・自余二人者<sup>ハ</sup>・帶也<sup>ヒトワビ</sup>・在厨子一脚<sup>ハ</sup>・  
納顯蜜ノ聖教<sup>ヲ</sup>・又真言ノ道具一具・納之<sup>ニ</sup>・三衣等在此内<sup>ニ</sup>・

〔以上本文〕

東室大房柱口広

小子房柱口倭

保安二年<sup>壬午</sup>十一月廿七日奉移新聖靈院又三昧同年云、

此ノ聖靈院ノ内ニ在鍾・長

口広

西浦在経藏・委クハ奥ニ注之<sup>ヲ</sup>・

東室者ハ間ニ寛狭不定ナリ

此聖靈院ニ金鼓一口在之・

三人ノ皇子<sup>ト者</sup>・大兄山背王<sup>イハ</sup>・殖栗王<sup>ヲ</sup>・卒末呂王<sup>マロノ</sup>也・

太子御歳卅四勝鬘經講讚御影也

次度講經冊<sup>五</sup>四御時此正説也

此御影本正蒼院北面向御即本聖靈院也云、

三尊形式の聖徳太子像

を進めよう。

## 二

現在知られているBタイプの三尊形式の太子像は、すでに触れたごとく5・6・7・10（図版三）・12（図版四）の五点で、そのAタイプと異なる顕著な諸点は、両脇侍像の持物がちがうこと。歩みの方向がすべて左であること。上部に賛が認められること（ただし6には賛をみないが、その上部の寸詰り状況より推し、後世改装のさい切断された可能性が高い）。7・10・12の太子像には、空頂黒幘くうていこくまきと呼ばれる三角状の冠が額際ひたいぎわについていること。太子着する袍ほうの裾きよが長いことなどがあげられるかと思うが、実はこれらの諸特徴こそが、Bタイプの性格を解明する重要な鍵となるものであろう。

このBタイプ像につき、石田茂作博士は「孝養太子像を中央にして、左右に二童子を侍せしめ、一童子は燭台をささげ、一童子に天蓋を持たせるものがある。遺例に神奈川県中村岳陵氏蔵・京都府二尊院蔵とがあるが、二童子を誰れに当てるかは私には判らない」とされる。<sup>(10)</sup>しかし、以下に説くとおり私見では、燭台を持つのが太鳥部文屋松子、傘蓋を差掛けるのが調子丸うちしまる（調使丸・調子磨・調使麻呂・調子麻呂・調使磨とも）という共に太子のそば近く仕えた伝説上の舍人と考えるので、そのへんのところを明らかにしてみたい。

まず注目したいのは、Bタイプ像にみられる賛の文である。5はそれがよくわからず、また6は上述のごとく今



はないので、7・10・12の三本をみてみよう。次のようになる。

7 個人蔵本

大慈大悲本誓願

愍念衆生如一子

是故方便從西方

誕生片州興正法

我身救世觀世音

定慧契女大勢至

生育我身大悲母

西方教主弥陀尊

10 二尊院本（図版三）

大慈大悲本誓願

愍念衆生如一子

是故方便從西方

誕生片州興正法

我身救世觀世音

定慧契女大勢至

生育我身大悲母

12 薬師寺本（図版四）

大慈大悲本誓願

愍念衆生如一子

是故方便從西方

誕生片州興正法

我身救世觀世音

定慧契女大勢至

生育我身大悲母

西方教主弥陀尊

真如真実本一鉢

一鉢現三同一身

三本に共通するこの文は、いうまでもなくかの有名な廟<sup>びやうくつげ</sup>崛<sup>け</sup>偈<sup>ぎ</sup>の前半部に相当する。したがって賛の文字が不明なら、および現在それを欠く6にも、元来やはりこの偈文が着賛されていた可能性が高いと推定する。

廟<sup>びやうくつげ</sup>崛<sup>け</sup>偈<sup>ぎ</sup>は周知のごとく元来十行二十句よりなり、生前の太子が自分の廟所である河内磯<sup>かわちしなが</sup>長<sup>なが</sup>（科長とも）の廟<sup>びやうくつげ</sup>崛<sup>け</sup>内にみずから書き注しておいたものと古来固く信じて疑われず、諸種の太子伝に載せられて広く流布した。親鸞聖人

も自作の『皇太子聖德奉讃』や『上宮太子御記』にこれを書き写し注意を寄せているが、しかし内容的にみて浄土教が強く反映しているところからもわかるように、廟傭偈はとうてい太子の自記などといえるものではなく、平安中後期の浄土教勃興と共に磯長廟関係の僧が、太子に仮託して作ったものと思われる。<sup>(12)</sup>

さて、それはそれとして、このような廟傭偈が太子によって注される前後の模様につき、寛正三（一四六二）年書写の識語をもつ愛知万徳寺藏『聖德太子伝』五は、次のように伝えて興味深い。<sup>(13)</sup>

即科長ノ御廟<sup>ヲ</sup>巡見在<sup>ニ</sup>命<sup>ニ</sup>墓工<sup>一</sup>曰<sup>ハク</sup>吾<sup>レ</sup>以<sup>ニ</sup>已年ノ春<sup>ヲ</sup>必至<sup>ニ</sup>彼ノ処<sup>ニ</sup>汝早<sup>ク</sup>可<sup>レ</sup>造<sup>レ</sup>墓土師連啓白<sup>ハシノラシケイ</sup>  
墓已<sup>ニ</sup>造畢<sup>セリ</sup>未<sup>レ</sup>聞<sup>ニ</sup>誕<sup>ニ</sup>道<sup>一</sup>太子命曰<sup>ハク</sup>勿<sup>レ</sup>開<sup>ニ</sup>遂道<sup>ヲ</sup>但墓ノ内<sup>ニ</sup>設<sup>ニ</sup>床<sup>一</sup>墓工啓ノ曰<sup>ク</sup>即構<sup>ヘ</sup>畢<sup>ヌ</sup>  
太子入<sup>リ</sup>マシマシテ廟傭<sup>ニ</sup>神妙也ト再三勅<sup>ク</sup>在<sup>リ</sup>西ノ方ノ之立石<sup>ニ</sup>御一期ノ本地垂跡ノ之利生悉<sup>ク</sup>書<sup>キ</sup>注<sup>シ</sup>給<sup>フ</sup>

碑ノ文<sup>ニ</sup>云<sup>ク</sup>松子侍<sup>ニ</sup>廟ノ内<sup>ニ</sup>  
親<sup>ニ</sup>見<sup>レ</sup>之<sup>云</sup>

大慈大悲本誓願

愍<sup>ニ</sup>念衆生<sup>ヲ</sup>如<sup>ニ</sup>一子<sup>一</sup>

是故<sup>ニ</sup>方便從<sup>ニ</sup>西方<sup>一</sup>

誕<sup>ニ</sup>生片州興<sup>ニ</sup>正法<sup>一</sup>

我身救世觀世音

定惠契女大勢至

生育我身大悲母

西方教主弥陀尊

真如真実本一体

一体現<sup>ニ</sup>同<sup>ニ</sup>一身<sup>一</sup>

片域化縁<sup>モ</sup>亦已<sup>ル</sup>

還<sup>ニ</sup>帰西方我浄土<sup>ニ</sup>

為度<sup>ニ</sup>末世諸衆生<sup>ヲ</sup>

父母所生血肉身<sup>ヲ</sup>

三尊形式の聖徳太子像

六〇

遺<sup>コシ</sup>留<sup>ム</sup>勝<sup>タル</sup>地<sup>タル</sup>此<sup>ナリ</sup>ノ廟<sup>ハ</sup>崛

三骨ノ一廟ハ三尊ノ位ナリ

過去七仏法輪所ナリ

大乘相應功德地

一度參詣ハ離<sup>ハ</sup>惡<sup>ニ</sup>趣<sup>ニ</sup>

決定ノ往<sup>ニ</sup>生<sup>ニ</sup>極樂界<sup>ニ</sup>

右の文意は、推古二十七（六一九）年春、太子が河内科長（磯長）廟を巡見された際、墓工に命じていわれるには、吾は巳年（推古二十九年）の春に必ず彼の土へ至るから、早く墓を造るようにと。すると墓工の土師連が、墓はすでに造り畢えているものの埴<sup>えんどう</sup>道（延道・羨道とも書き、横穴式古墳の入口）羨<sup>えんどう</sup>門から玄室に至るまでの部分）をいまだ開いていないとつつしんでもうすと、太子がそれを開かないように命じ、墓内に二床（この場合は太子夫妻の石棺）を設けよといわれた。そこで墓工がすぐさまそれを構えたところ、太子が廟堀内に入られ神妙であるといい、堀内西方の立石に廟堀偈を書き注された。そのとき太子の舍人大鳥部文屋松子も侍り、まのあたりこれを見たというのである。

これに関し法隆寺頭真の『聖徳太子伝古今目録抄』には「太子廟堀内石面自注記文<sup>（14）</sup>松子<sup>（15）</sup>がその廟堀偈を写し流布せしめたとの割注を施し、さらに同偈は法興三十一（六二二）年十二月十五日に太子が、善光寺の阿弥陀如来へ献じた文で、善光寺如来からも「善哉々々」の返事が同月十八日にあった。よって即日太子が廟堀内に偈文を書いたという次掲のごとき記事を載せ、その往復書簡の使者は、調子丸であったことを付記する<sup>（16）</sup>。

太子ノ献善光寺ノ阿弥陀如来<sup>ニ</sup>給<sup>フ</sup>御文ノ事・表書云謹上本師阿如来云、下<sup>ニ</sup>觴<sup>ニ</sup>廐<sup>ニ</sup>戸<sup>ニ</sup>、

御文ノ語ハ大慈大悲本誓願等之廿句也<sup>（勝鬘（陀））</sup>文法興元世一年辛巳十二月十五日廐戸上。阿弥如来御返事

云上宮王救世大聖御返事善光上御文ノ語ニク善哉々々大薩埵善哉々々大安樂善哉々々麻訶衍善哉々々大智恵左右不具云、同月ノ日善光カ上ケ今月ノ十八日還来云、其日即御廟ノ中ニ自書之給御使調子  
廿句文  
於東大寺戒壇院伝之建長七年冬比  
最秘事也宣ケリ  
乘黒駒云

ここにみえる調子丸は、太子の愛馬黒駒の馬丁で、太子と終生を共にした従順なる舎人のひとりであるが、実は眞真その人が、調子丸二十八代の孫を自認していたため、彼は熱烈な太子信奉者となつて、しばしば引用する『聖徳太子伝古今目録抄』を著わし、鎌倉時代における太子信仰興隆の一翼を担つたのであつた。<sup>(17)</sup>

以上のように廟幅偈をめぐる太子周辺の人物を伝記上にもとめていくと、松子と調子丸の二人の舎人が浮んできた。このことを念頭において、Bタイプの三尊形式太子像をあらためてながめると、それはいうまでもなく前に立つて燭台を持ち幅内を案内する体の左像が松子であり、太子に傘蓋を差掛け後に付従う右像が、東北地方に多く遺存するマイリノホトケの太子黒駒富士登岳像に照しても明らか<sup>(18)</sup>なとおり、調子丸にはかならないことが納得できよう。かくみてきたうえでBタイプの太子像に注視すると、髪型がみずら垂髪であること。6・9・11の太子の額には、

三角状の宝冠がついていることのふたつの顕著な事象に気付く。この背後にわれわれは、民俗学でいうところの擬死再生儀礼の風を看取するのも、あながち不当でないかも知れない。というのはBタイプの太子像は、上述のように生前の太子が墓内に入る行為をあらわしているから、それはいったん仮に死んだ状態を意味する<sup>(19)</sup>。太子の額の三角冠は、今なお各地の葬送儀礼でみられる死者やそれを送る人達の額につける三角状の白紙・白布に同じいものであろう。これに関し『歴世服飾考』二下にみえる額烏帽子<sup>ひたいえぼし</sup>の次の記事が参考となろう。

幼帝御元服以前ニ空頂黒幘トイフモノヲ額ニアテタマヘルハ冠ノカハリナレバ額烏帽子モコノ類ニヤ  
古画ニ見ル所ヲ左ニ掲げ又亡者并ニ葬送ノ従者白紙ニテコレヲツクリ用ウル事今モ畿内辺ノ田舎ニア  
リトキケリ〔北野縁起〕（承久年信実朝臣ガ描キタル卷ナリ）ニ葬送ニ従事シタルモノ、中ニ折烏帽

子ノ上ニ白キ額烏帽子ヲアテタルモノアリ其遺風ナルベシ十界図ニモ見エ其他ニモアルベシ

またみづら垂髪は貴人が亡くなったとき、こういう髪型にして納棺するのか、あるいは垂髪はみづら以前の年少者の髪型であるから、子供になって再生してくることを表現している意とも受取れよう。はたしてそうだとすれば、身に袈裟をまとい両手に柄香炉を持つのも、通常の十六歳孝養太子像をあらわしているのではなく、「御一期本地垂跡之利生悉書注給」（前引万徳寺本『聖徳太子伝』）という太子晩年の本地垂跡利生像とでも称すべき姿の可能性の方が、はるかに高いであろう。それは成年男子が着す縫腋ほえきの袍ほうの裾きよが長いことによっても十分首肯されるところといわなければならない。このようにみてくると、従来特異な太子像として注目されていた奈良成福寺蔵の彫像太子と兵庫豊田義雄氏蔵の画像太子も、非常(20)にBタイプの太子像に似ているところから、やはり共に磯長廟崛にかかわる本地垂跡利生太子像とみることができようかとも思う。

## 三

Bタイプの太子像に関連して、最後にぜひ触れておきたいのは、初期真宗で多くみられる真向まむきの垂髪すいはつ太子像の

ことである。本願寺蓮如（一四一五—九九）、専修寺真慧（一四三四—一五二二）が出現するあたりまでを真宗史の初期とみるが、この時代の光明本尊こうみんほんぞんに描かれる太子像や太子画像、あるいはマイリノホトケの太子像は、ほとんど例外なく垂髪で真正面を向いている。<sup>(21)</sup>これは同時期の真宗で行なわれた右手に笏、左手に柄香炉を持ついわゆる真俗しんぞく二諦太子像と異なる像容として、一考すべき余地があるように思うが、このことにつきかつて宮崎圓邊博士は、愛知妙源寺藏光明本尊に代表される太子像協の「聖德太子御廟記文 掘出一銅函其蓋銘曰 吾為利生出彼衡山入此日域 隆伏守屋之邪見 終顯仏法之威徳」という銘文に着目して、この型の太子像もやはり孝養像ではなく、同じ十六歳のときながら、仏法の威徳を顯わす太子像と解すべきであろうとされた。<sup>(23)</sup>これはまことに卓見といわなければならない。

右の「聖德太子御廟記文」というのは、天喜二（一〇五四）年に忠禪なる僧が、磯長廟地内に宝塔をたてるべく削地したところ、金銅製の函が発掘され、その蓋に刻されていた太子自記の銘文であると伝えるものだが、おそらく天喜二年あたりの作為物であろう。これが出現したときの事情を正嘉元（一二五七）年親鸞聖人編する『上宮太子御記』は、古記を引用して次のごとく伝える。<sup>(24)</sup>

#### 太子御廟ノ註文出現ノ事

後冷泉院即位第十季也 天喜二季歳次甲午僧忠禪為起宝塔 削手干地 而間此中掘出一銅函 其蓋銘曰 今年歳次辛巳河内国石川郡磯長里有一勝地 尤足称美故点墓所已了 吾入滅以後及于四百叁拾余出歳 此記文出現哉 爾時国王大臣 發起寺塔 願求仏法耳云 内銘曰 吾為利生彼衡山入此日域 隆

伏守屋之邪見 終顯仏法之威徳 於処処造立四十六箇之伽藍 化度一千三百余歳之僧尼 製記法華勝鬘維摩等大乗義疏 断悪修善之道漸以満足矣

ところで、ここで注意を喚起したいのは、光明本尊の銘文にも使用されている右の「聖德太子御廟記文」が、かの廟軀偈と同様やはり磯長廟に直接関係するものであるということであり、したがって磯長廟の太子といえ、誰しもがBタイプでみた垂髪像を想起するところから、初期真宗の太子像もそれがイメージされて描かれたことが考えられよう。ただそれがあたかも木彫像のごとく真向き像となつてゐることについては、建久二（一一九一）年親鸞聖人十九歳の時の

爰<sup>コトニ</sup> 仏子範<sup>ニ</sup> 宴思<sup>ヒ</sup> 入胎五松ノ夢<sup>ユメ</sup> 一常<sup>ニ</sup> 仰<sup>アツ</sup> 垂迹<sup>ス</sup> 利生<sup>ノ</sup> 一今幸<sup>ニ</sup> 詣<sup>マツ</sup> 御廟窟<sup>ニ</sup> 三日參籠懇念失<sup>サシ</sup> 已<sup>レ</sup> 矣<sup>ヲ</sup>

第二<sup>ニ</sup> 夜四更<sup>ヨシカ</sup> 如<sup>レ</sup> 夢<sup>ユメ</sup> 如<sup>レ</sup> 幻<sup>マボロシ</sup> ノ 聖德太子從<sup>ヨリ</sup> 廟内<sup>ベウナイ</sup> 一自<sup>ミツヒライ</sup> 發<sup>セ</sup> 石<sup>セキ</sup> 局<sup>ケイ</sup> 一 光明赫<sup>カクセントノ</sup> 然<sup>ニ</sup> 而<sup>チ</sup> 照<sup>テ</sup> 於<sup>ニ</sup> 窟中<sup>クツチュウ</sup> 一 別<sup>ニ</sup> 三<sup>ニ</sup> 満<sup>ニ</sup>

月<sup>イフノ</sup> 在<sup>コシヤク</sup> 現<sup>ニ</sup> 金赤<sup>サウ</sup> ノ 之<sup>カウチヨクノ</sup> 相<sup>ハク</sup> 一 告<sup>ハク</sup> 勅<sup>ハク</sup> 言<sup>ハク</sup>

我<sup>ガ</sup> 三<sup>サン</sup> 尊<sup>ソン</sup> 化<sup>ケ</sup> 塵<sup>ジン</sup> 沙<sup>シャ</sup> 界<sup>カイ</sup> 日域大<sup>ジチキダイ</sup> 乘<sup>セイ</sup> 相<sup>サウ</sup> 応<sup>ウウ</sup> 地<sup>チ</sup>

諦<sup>タイ</sup> 聴<sup>イ</sup> 諦<sup>イ</sup> 聴<sup>イ</sup> 我<sup>ガ</sup> 教<sup>ケウ</sup> 令<sup>レウ</sup> 汝<sup>ニ</sup> 命<sup>メイ</sup> 根<sup>コン</sup> 底<sup>ソウ</sup> 十<sup>シウ</sup> 余<sup>ヤ</sup> 歳<sup>サイ</sup>

命<sup>ミヤウシユツク</sup> 終<sup>ニ</sup> 即<sup>ニ</sup> 入<sup>ニ</sup> 清<sup>ニ</sup> 淨<sup>ニ</sup> 土<sup>ニ</sup> 善<sup>ゼン</sup> 信<sup>シン</sup> 善<sup>ゼン</sup> 信<sup>シン</sup> 真<sup>ホ</sup> 菩<sup>サツ</sup> 薩<sup>サツ</sup>

干<sup>トキ</sup> 時<sup>ニ</sup> 建<sup>ケン</sup> 久<sup>キウ</sup> 二<sup>ニ</sup> 年<sup>ニ</sup> 辛<sup>カノト</sup> 亥<sup>ノ</sup> 暮<sup>ボ</sup> 秋<sup>キウ</sup> 中<sup>チュウ</sup> 旬<sup>シュン</sup> 第<sup>ジ</sup> 五<sup>ゴ</sup> 日<sup>ニチ</sup> 午<sup>ゴ</sup> 時<sup>ジ</sup> 記<sup>シ</sup> 二<sup>ニ</sup> 前<sup>ゼン</sup> 夜<sup>ヤ</sup> ノ 告<sup>ガク</sup> 令<sup>レ</sup> 一<sup>ニ</sup> 畢<sup>マツ</sup> 又<sup>マタ</sup> 仏子範<sup>ニ</sup> 宴<sup>ニ</sup> 思<sup>ヒ</sup> 卜<sup>ハク</sup> 云<sup>ク</sup> 云<sup>ク</sup>

〔正明伝<sup>(25)</sup>〕

という磯長夢告の神秘的な太子の姿が、ここに反映されているように思えてならないのである。が、その磯長の夢告自体が、実際にあったのかどうか問題視されている現在、右のごとく早急に結論づけることは、今のところやは

り差控えておくのが穏当であろう。

以上、三尊形式の聖徳太子像をめぐる欲しいままな考察を重ねてきたが、これを要するに三尊太子像は、かの唐本御影をその基本として、A・Bふたつのタイプが成立する。しかしてAタイプの左右像は、法隆寺聖霊院像に照し、太子の王子である山背大兄王と殖栗王と知られ、Bタイプのそれは磯長廟にかかわる太子の二人の舍人松子と調子丸であろうと考えられる。そして初期真宗の太子画像も後者からきているが、それが通常の絵像とは異なり真向きであるのは、宗祖親鸞聖人の磯長夢告に現われた太子の姿が反映しているのではないかと推察してみた。しかしながら見当はずれな誤謬も多々犯しているに違いなく読者諸彦のご叱正を仰ぎたく思う次第である。本稿執筆にあたり有益なご教示をたまわった同朋大学仏教文化研究所の渡辺信和氏、蒲池勢至氏、安城歴史博物館の天野信治氏、大阪市立美術館の石川和彦氏に対し深甚の謝意を表したい。

# 註

- (1) 石田茂作『聖徳太子尊像聚成』総説編・図版編 一九七六年二月 講談社。
- (2) 唐本御影については左書を参照されたい。  
高田良信・堀田謹吾『ドキュメント追跡! 法隆寺の秘宝』一九九〇年四月 徳間書店。  
至宝委員会事務局『皇室の至宝Ⅰ 御物 絵画Ⅰ』一九九一年三月 毎日新聞社。
- (3) 小倉豊文氏は後掲書において、三尊形式の太子像を次のごとくあげておられるが、この中には現在所在が不明であったり移動しているものもあるため、当論の表と一致しないところがある。

孝養像 彫像

〔大阪府〕大聖勝軍寺(室、三尊)

三尊形式の聖徳太子像



三尊形式の聖徳太子像

〔兵庫県〕 鶴林寺（鎌、三尊、座）

孝養像 画像

〔神奈川県〕 中村岳陵氏

〔滋賀県〕 穀屋寺（三尊）

観音寺（重文、室、三尊）

〔奈良県〕 東大寺（室、三尊）

〔兵庫県〕 鶴林寺（重文、鎌、五尊）

橋本喜造氏（鎌、三尊）

〔大阪府〕 將軍寺（三尊）

古香庵（鎌、三尊）

法道寺（江、三尊）

〔京都府〕 二尊院（室、三尊）

〔不明〕 伊藤氏旧蔵（鎌、三尊）

摂政像 画像

〔東京都〕 国立博（白鳳、立、三尊、伝阿佐太子筆）

〔京都府〕 神田喜左衛門氏（立、三尊）

小倉豊文『訂聖徳太子と聖徳太子信仰』一九七二年七月 綜芸舎 附録四六―七、五〇ページ。

なお、京都広隆寺桂宮院に宮を両手でささげもつ鎌倉時代の殖栗王と考えられる立像があり、その像容より元は山背大兄像と共に太子像を中心とした三尊形式像であった可能性が非常に多いが、本像のみしか残らないので、今は表に加えないこととする。

（4） 荻野三七彦『聖徳太子伝古今目録抄』一九三七年二月 法隆寺 九一―一〇ページ。

（5） 註②の両書には「川原寺」のことについては何も触れられていない。

（6） 註①の総説編三四ページ。

（7） この事実を東野治之「聖徳太子画像の『墨書』」（『出版ダイジェスト』一九九一年九月三十日で明らかにされたことが、

左書から知られる。

武田佐知子『信仰の王権 聖徳太子 太子像をよみとく』一九九三年二月 中央公論社 中公新書 二二二ページ。

(8) 奈良国立文化財研究所『七大寺巡礼私記』一九八二年三月 奈良国立文化財研究所 二二八―九ページ。

(9) 註(4)の二三ページ。

(10) 註(6)に同じ。

(11) 拙稿「親鸞見写の廟輻謁」(『真宗研究』三四)一九九〇年三月。

(12) 寛弘四(一〇〇七)年慈蓮発見の『四天王寺御朱印縁起』、天喜二(一〇五四)年忠禅発掘の『磯長銅函銘』なども太子の手記と称され大いに広まったが、これらも廟輻謁同様浄土教の発達、太子信仰の高揚にともなう産物にはかならなかった。

(13) 小島恵昭・渡辺信和「共同研究―万徳寺藏『聖徳太子伝』翻刻―」(『同朋学園仏教文化研究所紀要』一一)一九八〇年三月 三二五ページ。

(14) 註(4)の四七ページ。

(15) 太子の没年月日や没齡には諸説があるため、ここでは万徳寺本『聖徳太子伝』と年次が必ずしも一致しない。

(16) 註(4)の七八ページ。

(17) このへんの事情については、註(4)の荻野三七彦博士の著書に詳しい。

(18) 註(1)の図版編22頁27・919頁985参照。

(19) 五来重「聖徳太子と夢殿」(『日本人の仏教史』一九八九年七月 角川書店所収)にすでにこの指摘がなされている。

(20) 石田茂作『聖徳太子全集』五一―九四三年七月 龍吟社 口絵五。図版五八。

田中重久『聖徳太子絵伝と尊像の研究』一九四三年八月 山本湖舟写真工芸社 百三図 五十八図。

註(1)の図版編11。530。

(21) 初期真宗の光明本尊、太子画像、マイリノホトケは、註(1)・(20)の図書以外、左にも多く収録されている。

信仰の造形的表現研究委員会『真宗重宝聚英』二・七 一九八七年二月・一九八九年二月 同朋舎出版。

(22) 右手に笏、左手に柄香炉を持つ真宗の太子像について、最近天野信治氏が興味深い説を提示しておられる。

安城歴史博物館『聖徳太子像の造形―真宗の聖徳太子像』一九九三年四月 安城歴史博物館。

(23) 宮崎圓遵「初期真宗の聖徳太子像について」(『日本仏教学会年報』二九)一九六四年三月。この論文はのち左書に収録されている。『真宗史の研究(上)』宮崎圓遵著作集四 一九八七年十一月 思文閣出版。

(24) 親鸞聖人全集同人『親鸞聖人全集』輯録篇2 一九五九年二月 親鸞聖人全集刊行会 三九三ページ。

(25) 『親鸞聖人正明伝』卷一上・『高田開山親鸞聖人正統伝』卷一(平松令三『真宗史料集成』七 一九七五年二月 同朋舎 一〇〇ページ・三一九ページ)。

(26) 次の賛否両論がある。

古田武彦『親鸞思想―その史料批判―』一九七五年五月 富山房 三〇八五ページ。

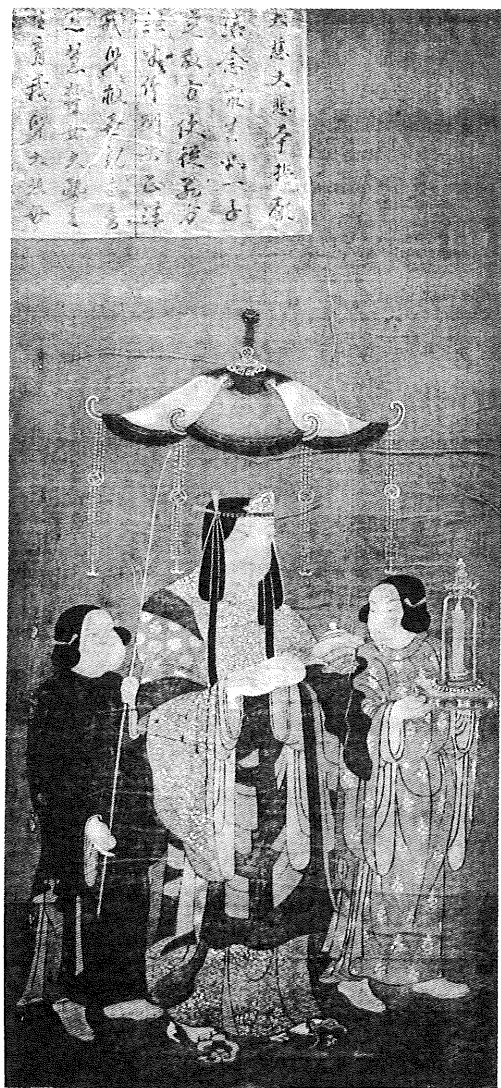
山田雅教「伝親鸞作「三夢記」の真偽について」(『高田学報』七五)一九八六年二月。

(平成五年六月九日)

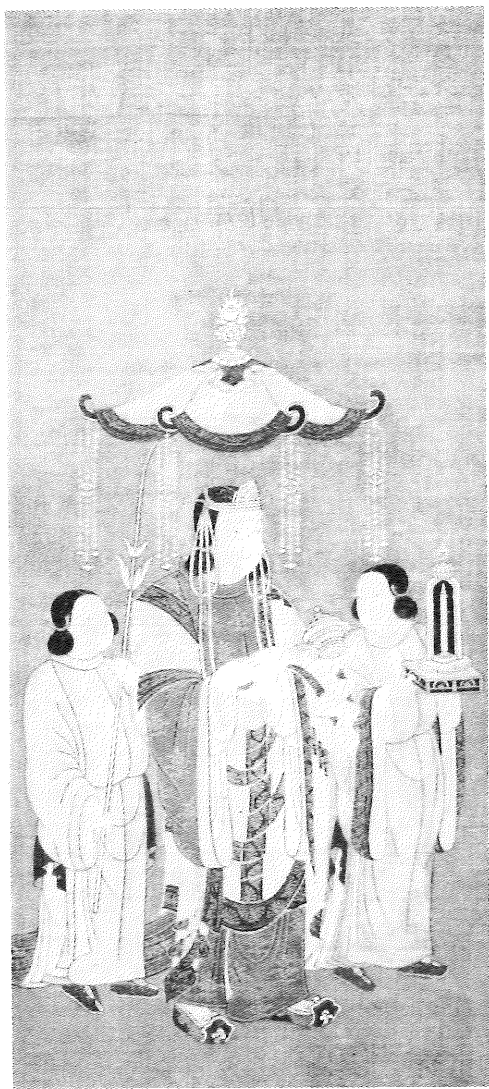


図版一 番号1 (模本) 愛知 本證寺蔵





図版三 番号10 京都 二尊院蔵



図版四 番号12 奈良 薬師寺蔵